No.45
2010. 12. 1

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■稲わらの灰汁（あく）で… ……1
■マンガルタール・ラジャバス集落を訪ねて ……2
■ラジャバスへの道 ……3
■しあわせ村民キャンペーン中間報告 ……3
■Laos 焼畑農業と生物多様性 ……4
■Cambodia 土地問題の現状 ……4
■北東アジアの10年、ともだち展の10年 ……5
■地球市民であり続けるために ……6
■生物多様性と私たち ……6
■外国籍の人たちにも住みやすい神奈川をめざして ……7
■デポーでハロハロ作り ……7
■あーすフェスタかながわ@本郷台 ……7
■活動日誌 ……7
■INFORMATION ……8

稲わらの灰汁（あく）で……

事務局長　筒井 由紀子

「あまりよい糸ではないみたいですが、このまま織ってもいいでしょうか？……」タケオの職業訓練センターの主任から至急の連絡が来た。来春に売り出すためのスカーフを発注したのだが、サンプルを織ってもらうために渡してあった糸がよくないらしい。どうしてだろう？前と同じ糸を買ったのに、そんなはずはない。すぐに作業を中断するように伝え、この後、カンボジアを訪問する予定のフェアトレードショップ「トラグーン」の聖実さんに様子を見てきてもらうことにした。

聖実さんがタケオから連絡をくれた。よくよく話を聞いて見ると、どうやら、「精練」の方法に問題があるらしい。生糸の外側は「セリシン」という物質で、その部分を灰汁（あく）で溶かすとつやつや光り輝くシルク糸が現われる。これを「精練（セイレン）」という。ちょっと前まで、日本でも精練は稲わらを燃やした灰を熱湯に溶かし、その上澄み液で糸を煮る方法をとっていた。昔の人はそれを「絹糸を練る」といったそうだ。しかし「ダイオキシン問題」以降、モノを燃やすことが禁止されるようになり、現在では、炭酸ソーダ（炭酸ナトリウム）とモノゲン（洗剤）を使っておこなっている。

センターの織物の先生の話では、センターが出来た時に買った洗剤が無くなったので、代わりの洗剤を使ったという。どうやらその洗剤が原因のようだ。現地では、これから洗剤を買いに行くという。「稲わらは手に入るかしら？」と地球の木カンボジアチーム織物担当の大薮さんが電話を替わった。カンボジアでは、「燃やしてはいけない」という規制もないだろうに、なぜ、洗剤を使っているのか。大薮さんが電話で稲わらを使った精練の方法を詳しく伝えると「そんなやり方があるなら、やってみる」とすぐに現地が動き出した。幸い、稲わらもすぐに手に入り（さすがカンボジア！）、その日のうちに精練をおこなうことができた。一生懸命作業をやってくれたのは新しく責任者となったリムちゃんだ。その横で、織物の先生がじっと見ていたそうだ。先生はその後、半信半疑で煮上がった鍋から糸を手に取り、

精練の出来具合いをチェックする

その出来具合を確かめた。糸の仕上がりは上々だった。「洗剤なんか買わなくてもいいんだ・・」こうしてセンターでの「精練」の問題は無事解決した。

カンボジアのシルク織物は何世紀も前からずっとあるもので、技術もかなり高い。カンボジアの絣は日本の絣のルーツのひとつだとも言われる。なぜ、タケオのセンターでは、その精練にわざわざ洗剤を使っていたのか？単に、織物の先生が知らなかっただけなのだろうか？内戦の影響で、カンボジアには断絶された時代がある。カンボジアでは「その昔から受け継がれてきたはず」という当たり前が当たり前ではない。内戦の影響の大きさを改めて知らされる。他にも、海外からの支援がその要因かもしれない。たとえば、ドイツのNGOが化学染料を大量に支援していたので、同じように支援の過程で洗剤を使った精練をおこなうようになったのかもしれない。

支援される側は、先進国のやっていることを「優れている」として、古くから受け継がれているやり方ではなく、先進国のやり方を選びがちだ。稲わらを使うやり方は「古くさい」と思ったかもしれない。しかし稲わらを使えば、洗剤による河川や土壌の汚染もなく、しかもただですぐに手に入り、まさに一石二鳥で「持続可能な」やり方だ。農業や他のいろいろな分野の支援においても同じようなことが起きているのかもしれない。それぞれの国には、それぞれの先人の偉大な知恵がある。カンボジアのプログラムは大事なことを私たちに教えてくれている。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任 丸谷士都子 ■編集 広報部 ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

ネパール・マンガルタール現地調査報告

ラジャバス集落を訪ねて

8月29日～9月5日まで理事長（ネパール担当）の丸谷と記録係としてボランティアの藤井さんが訪問しました。

マンガルタール村で進めている「幸せ分かち合いムーブメント」では、奨学金、教師トレーニングなどの教育プログラムの他に、貧困家庭の収入創出プログラムも行っている。現在、収入創出のための野菜栽培支援は、最も奥地にあるラジャバスで実施されている。ラジャバスとはどのような場所なのか。今回の調査の一番の目的は、この地域を訪問し、そこでの生活を知り、収入創出プログラムの進捗状況を視察することであった。

ラジャバスってどんなところ？

ラジャバスは1,715mの高地にある。尾根道沿いに家々が点在している。集落と言っても結構細長い。ラジャバスのある第8区は、177世帯、1,136人が住んでいて最も人口の多い区である（2007年の状況調査より）。8区には小学校がひとつ、小・中学校がひとつある。高校まで歩いて3時間かかるため、進学者が少ない。

村人は農業を営み、ほぼ自給自足の暮らしをしている。主食はトウモロコシ。粉にして水と混ぜて鍋で練った「ディロ」というものを作る。畑は急斜面にあるため、足場が悪く、養分も流れやすい。飲み水は泉からパイプで引いているが、灌漑は雨水に頼る。以前は塩を買いに途中一泊して町まで歩いたそうだ。最近車の入れる道路が近くまで通るようになったため、現金収入への機会が生まれようとしている。よりよい生活への願望は強い。

ラジャバスにはタマン族とマガール族、それに少数のブラーミン、チェトリの高カースト、ダリット（低カーストの人たち）が住んでいる。仏教とヒンドゥー教が入り交じっているが、どの祭りにもみんなで参加するそうだ。家を建てる時は近所の人たちで助け合うことを誇らしく思う、とても素朴な人たちだ。

収入創出プログラム

プログラムを実施するに当たり、まず農業委員会が結成され、参加型農村調査を経て12名の農民が選ばれた。各農家に資金が融資され、春より様々な野菜づくりに挑戦している。そのうち2軒の農家を訪問した。

自分で編んだ籠を持つケッシャルクマリさん

ケッシャルクマリさん　55歳　息子3人　娘2人　野菜耕作地　約250㎡

畑は急斜面にある。まず「朝露にはミネラルなどの栄養分がいっぱいあるので、さわらないで」と注意を受けた。トウモロコシの間に大豆やトウガラシが植えてあった。夏に植えたトマトは1,000ルピー（1ルピー＝約1.2円）ほどの稼ぎとなったということだ。以前は家で食べる分だけの栽培だったが、市場にも出せるようになった。トマトとトウモロコシの種は自家製、カボチャとキュウリは市場のものを購入している。籠作りも上手なお母さんだ。問題は、水不足と、日差しが強すぎる場所があること。

チャメリさん　36歳　息子2人　娘2人　夫はマレーシアに出稼ぎ中　野菜耕作地　500㎡

一面トウモロコシが植わっていた畑は広いが、やはり急な斜面。トウモロコシの間に大豆が植わっていた。トウモロコシでは17,000 ルピーの売り上げがあったそうだ。小中学生の子どもたちが畑を手伝っている。村の中で情報交換し、新しい野菜の作り方を教えてもらったり、物々交換をしていると、楽しそうに語ってくれた。今後は需要の高いニンニクを植えていきたいと意欲的だ。

12人の参加者に集まってもらい、状況を聞いた。トウガラシ、なす、ニンジン、キャベツ、カリフラワー、ジャガイモ、トマト、カボチャ、キュウリ、大豆などを植えている。水不足と、虫害の改善がどの農家にも課題となっている。SAGUNコーディネーターのサルバジットさんはその対策として、農業委員会が郡政府に手紙を書いて訴え、指導員を派遣してもらうようアドバイスをしていた。農民自身が権利として行政のサービスを要求することが大切であることを重視している。

ラジャバスは遠隔地ではあるが、素朴で意欲的な人びとが住んでいる。道が通り、将来的には業者が次々と入り込んでくることが予測される。今の調和ある生活を維持するためには、農民たちが協同組合を作り、正しい情報を集め、団体で交渉していくことが必要である。そのためにも「幸せ分かち合いムーブメント」の役割が大切になることを強く感じた。

（丸谷 士都子）

ラジャバスへの道～
初めてのネパール

太陽がギラつく8月の終わり、SAGUNのサルバジットさん、丸谷さんと3人黙々、ラジャバスへ向けて、ジグザグの山道を歩いていた。立ち止まっては、息をハーハーさせながら、下界に小さく見える家々と、目の前に広がる美しい山並みを眺めていた。

途中、元奨学生たちが教えている小学校や識字教室に寄り、地球の木奨学金支援のその後を見る事が出来た。サルバジットさんがようやく、遠くの景色を指差し、「あれがラジャバスだ。」と言った先には、まだ山が3つ連なっている。

登り始めて約6時間半後、辺りが薄暗くなった先に、黒山のような人だかりが見えた。ラジャバスに着いたのだ。皆心待ちにしていた様子で、首がこらんばかりの花輪と、手を合わせ笑顔で「ナマステ」の歓迎の挨拶を受ける。村の子どもらは珍しい訪問者にわらわらと付いて回り、口をぽかんと開けては、こちらのニコリにニヤリと笑顔で応える。静まり返った暗闇にヤギの声だけが聞こえる。ホームステイ先の家では、地面に掘った小さなかまどを囲んで賑やかに夕飯作りが始まっていた。

そろーり中に入ると、皆、目をきょろきょろさせ、私一人の存在で静まり、もじもじしている様子であった。何処の国にも気まずい空気が流れるのか、誰かなんか話さなきゃというそんな空気の中、自己紹介をしてみた。そしたらぽつりぽつりと、はにかみながら皆も自己紹介。また沈黙するも、皆も私もどっと笑った。

横ではせっせと、皮付きのトウモロコシをかまどの火に直接入れ、皮が焦げ付くと取り出し、中身をぱらりと皿に取って食べだした。何とも言えぬ香ばしさと甘さである。「おいしい」と、首を縦に振る私に対して、皆笑顔で首をころころ横に振り、良かったと答える。ネパールでは首を横に振る事で、「Yes」の意味になるらしく、それが、どこか滑稽でかわいい。

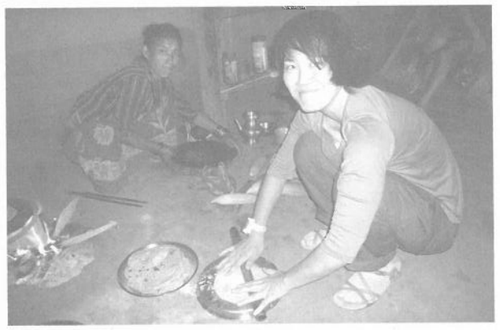
ホームステイ先の家の前で

朝、かまどの周りでは小麦粉と水を練った生地を丸く薄く伸ばし、パンを作っている。フライパン上である程度焼き、さらにかまどの灰の中へと入れる。プクーと膨らむと出来上がり。前日の暗がりで見えなかったが、こざっぱりとした家には台所用具以外何もない。

午後、中学校の一室で、入りきれない大勢の子ども達と、村人が集まって、質問大会が始まった。「学校以外で楽しい事は何ですか？」皆、目をキラつかせて次々に「家の手伝い」「読書」「兄妹の面倒」と答えた。目をまん丸くさせ聞いている姿が印象的であった。

その夜すっかり打ち解けたホームステイ先では、かまどを囲み笑いが絶えなかった。山を下りる朝、礼を言うと、かまどの周りは皆、はにかみながらもしんみりした様子で首を横に振ってくれた。私も首を横に振り、またここに来るよと伝えた。

（藤井 牧子）



パン作りをする筆者

しあわせ村民キャンペーン中間報告

9月に始まった、マンガルタール村の「しあわせ村民キャンペーン」に、10月6日現在、53人の申込み（一口1,000円）があり、次のようなメッセージが届いています。

- 学びたい気持ちに役に立てば嬉しい。頑張って。
- 一人でも多くの子ども達が教育の機会に恵まれ、幸せになりますように。
- 約束の言葉は、私も常日頃より心がけていること。日本の私とマンガルタール村の人達が同じ考えで生きていることに感動し、村民となることに喜びを感じる。私も日々困難を抱えているが、一緒に頑張りたい。
- マンガルタール村のみなさん、日本村の私達はどうしたら村民の約束を守れるようになるのか？ 教えてください。
- 皆さまと一緒に学び、楽しみたい。いつの日かお会いできることを祈って。

キャンペーンでは2011年1月30日まで村民を募集します。どんどんご応募ください。来春、皆さんのメッセージをマンガルタール村に届けます。村人からのメッセージにご期待ください。

（ネパールチーム　岸　夏代）

from Laos

焼畑農業と生物多様性

ラオスの村人が森から取れる有用林産物に依存した暮らしを営んできていることは、森林活動をご支援くださっている地球の木の皆様もよくご存知と思います。森は村人にキノコやタケノコ、野ネズミといった食料だけでなく、薬草や、お線香のもとになる木の皮といった現金収入の手段も与えてくれます。 ある研究では、村人は栄養価、現金収入の両方において、その半分かそれ以上を森から得ているとされているくらいです。

焼畑式農業もまた、ラオスの村人が伝統的に行ってきたことです。生物多様性条約第10回締約国会議が本年開催されたこともあり、最近話題の生物多様性ですが、生物多様性は人間の活動によって常に負の影響を受けるだけというわけではありません。人間の手が入ることでかく乱され、多様性が増す場合もあります。1ヵ所の土地を土がダメになるまで酷使してから移動するかたちでなく、多くの耕作地を持って、１ヵ所では1～2年しか耕作を行わずに、循環していく方式で行われる場合、焼畑式農業もこの生物多様性のかく乱→多様化に寄与することがあります。

例えば、村人が12の耕作地を持っている場合、現在の耕作地、昨年の耕作地（休耕1年目）、一昨年の耕作地（休耕2年目）という風に、様々な特徴を持った12の耕作地を持つことになります。実は村人はこういった焼畑休耕地から有用林産物を採取しているのですが、それら有用林産物には、休耕1～4年目の土地では多く取れるのに、その後取れなくなるものがあったり、逆に8年くらい経たないと現れないものもあるのです。時間の経過とともに植生が変わり、そこで取れる林産物も、そこに棲む動物も変わってくるわけです。多くの村人は、先祖代々の知恵でどこにどんな林産物があるかを知っていて、欲しいものによって行き先を変えているということです。

しかし、こういった林産物採取も、循環型焼畑も、豊かで広大な森があってのことであり、状況が変われば全く同じやり方がいつまでも続けられるとは限りません。状況変化には、人口増加の圧力もありますが、企業の商業植林による土地取得も大きな問題です。森林を守る活動は、村人の暮らしを守る活動でもあるのです。

（JVCラオス事務所現地代表　平野 将人）

「滋養強壮に効くんだよ」と村の男

from Cambodia

開発の進むプノンペン市街

「ここでの生活は、まるで刑務所にいるようだ」。ある村人が言った。

この村人の住むコンポン・スプー州の地域では、企業の大規模な砂糖きびプランテーションの計画によって、1,000家族以上が影響を受けている。約200家族が既に移住を強いられ、再定住地区での生活を余儀なくされている。人々は以前、主要な道路に簡単にアクセスできたが、再定住地区からは遠すぎて主要な道路にも市場にも行くことができなくなった。住んでいた家も、長年かけて育ててきた作物も失い、また、子どもたちは学校に行けなくなった。先の村人の発言は、そんな再定住地区での生活を表現した言葉だった。

近年のカンボジアでは、土地問題が深刻化する一方である。特に、このコンポン・スプー州の事例のように、カンボジア政府から経済コンセッションを得て、何千ヘクタールという大規模な土地を利用するケースでは、被害を受ける家族数も多く、様々な問題が起きる。企業の開発計画についての住民への説明不足、開発計画による環境・社会アセスメントの実施の遅れ、住民への不十分な移転補償などである。さらに、こうした企業に対して抗議をする住民の逮捕も年々増加する傾向にある。コンポン・スプー州のケースでも、2名の住民代表が一時拘束されたが、地元住民たちがこの2名の早期釈放を求めて数百名規模で州裁判所や州庁舎の前での座り込みを続けた結果、5日後に2名は保釈された。

住民代表の逮捕という最悪の事態は避けられたものの、開発計画による住民たちの田んぼや畑、さらには居住地まで失うという問題の根本的な解決には至っていない。この解決を求め、これまでに地方行政の協力のもと何度か企業との交渉を試みたが、企業側がこうした交渉に参加することはほとんどなく、企業のプランテーションの計画は、住民に対する問題解決のないまま進んでいく一方である。

「私たちの願いはとても単純なもので、今住んでいる家と、作っている田んぼや畑をそのままにしておいて欲しいだけなんだ」。この地域の村人たちはこう言う。人々は多くのものを求めてはいない。ただ、自分の家族、子どもたちが今後生活していくための土地を守っていきたいだけなのだろう。

カンボジア和平が成立してから来年で20年、ポル・ポト派の終焉から約10年が経ったカンボジア。著しい経済成長を続けるこの国は、開発の時代に入ったと認識されている。しかし、その開発は誰のためのものなのか。これまで、自分の家、田んぼ、畑を持ち、農業を営んできた人々が、「開発」によってそれらを失い、これまでよりもより厳しい状況の生活を強いられているのが土地問題の現状である。こうした土地の現場にいると、開発の在り方に対して疑問を感じずにはいられない。

（カンボジア市民フォーラム現地調整員・上智大学大学院　上村 未来）

北東アジアの10年、ともだち展の10年

人・モノ・情報の往来が壁を破る

米国同時多発テロを発端に、出口の見えないトンネルに入ったような21世紀の幕開け。けれど、2000年に南北首脳会談を実現させた朝鮮半島には、平和への追い風を感じたものです。未だ「停戦」状態に過ぎない南北が、モノや人の往来をスタートさせてから10年。韓国では、「やっぱり北は変わらない」「それより国内経済が問題、北にばかりかまけていられない」という冷めた声も聞こえ始め、現実派路線を標榜する李明博政権も誕生しました。拉致・核・ミサイルで北朝鮮アレルギーになってしまった日本は、「それみたことか」とばかりに冷静な傍観者を気取っているようにも思えます。併合百年に際して「これからの百年を見据え、未来志向の日韓関係を構築していきます」と謳いあげた菅首相のコメントは、日本が植民地支配したのは「大韓民国」だったかのように、半島の北側には目を閉ざし続けています。

でも、本当にこの10年はムダだったのでしょうか。この9月、韓国・ソウルにある63ビルの展望台にのぼったときのことです。壁に並んだ願いごとの短冊の一つを指して、韓国の友人が言いました。「見て、韓国人もこんなことを普通に書く時代になった」。それには、北の人びとが食に困ることなく、ともに幸せに生きられる日がくるように、とありました。徹底的な反共教育を受け、本当に人間が住んでいるのかさえ定かでなかった「北の地」の実情が伝わるようになり、韓国の人びとの意識も対立から共存模索の方向へと変わってきたのです。朝鮮の人びとが南から受けた衝撃は、南の人たち以上だったことは想像に難くありません。情報の断絶を交流という「しなやかな力」で克服する。その威力は、決して無視できないものなのです。

「おまつりひろば」に集う日を夢見ながら

ピョンヤンで共同制作

地球の木が参加する「南北コリアと日本のともだち展」も、交流によって相互理解を深めようという取り組みです。子どもたちの絵を往き来させて、自分の生活を伝え、相手の想いを受け止める、そんな場を開き続けて10年がたちました。ピョンヤンの小学校の校長先生は「何より良かったのは、日本で悪くばかり言われる朝鮮の子どもたちの明るい姿、希望を絵に託して伝えられたこと」と話し、卒業生は「私の絵が日本に行き、多くの人に見てもらえたのが印象深い。,いつか日本の子どもたちに会ってみたい」と言います。ピョンヤンの人が日本の「フツーの人」「平和を望む人」の存在を知った。それだけでも、後退できない平和への一歩と思えます。

日朝関係の悪化とこう着状態で、近年はピョンヤンでの絵画展が難しくなり、今は「見せられないなら、参加型で」と、東京―ピョンヤン―ソウルを巡る共同制作に取り組んでいます。今年のタイトルは「行こうよ！カジャ、カジャ！(行こう、行こう、の意)おまつりひろば」。３都市からスタートした道が途中で合流し、子どもたちが空の国など様々なゾーンをともに冒険しながらおまつりひろばにたどり着く、5メートルの大絵巻です。10年の集大成ともいえるこの作品を、12月2～5日まで東京・青山のこどもの城で展示します。ぜひ見にいらしてください。

（南北コリアと日本のともだち展実行委員会事務局　寺西 澄子）

鞍山だより『フロムA』（第1回）

・・・地球市民であり続けるために・・・

ロシア風の建物は鞍山師範大学の図書館

8月28日(土)、中国遼寧省鞍山に日本語教師として赴任した最初の夜は、なにか現実感のない変な気分だったのを覚えている。「ちょっと古いです」と言われていた外国人教師用宿舎はトラブルの連続。キッチンの換気扇をまわすとブワーッと排気管ごと吹き上がる。バリバリっと浴室の天井が落ちたと思ったら、次の日はカランにヒビが入って噴水状態、浴室中水浸しになる。インターネットも日増しに状態が悪化。外界との繋がりが断たれるようで、ものすごいストレスになった。幸い、留学生用の部屋ならネットが繋がることがわかり、部屋を引っ越すことでなんとか解決。

鞍山師範大学は町はずれにあるため静かな環境だが、週2回開発区にある技術専門学校に行くとき、鉱山と製鉄・鉄鋼業都市であるこの街の実態を目の当たりにする。信号も車線も無視してあふれる人と車。スモッグに霞むビル。それだけパワフルな街ではあるが。

☆斎藤さんの鞍山だよりが書かれているブログ「フロムA」です。
http://d.hatena.ne.jp/key-chi/

学生たちは、みな日本の大学生より若く見え、唯一の日本人教師である私に、人なつこい笑顔を向けてくれる。日本語学科といえども教室以外で日本語を使う機会が皆無の彼らの日本語力は決して高くはない。しかし、熱心な学生は日本語を使う機会を作るために、食事に誘ってくれたり、遊びに行くのに誘ってくれたりする。

9月10日は「教師の日」、教室で花束をもらいビックリ。やはり嬉しい。9月18日（満州事変勃発の日）には「勿忘国恥」の横断幕は出るが、別に何があるわけでもない。尖閣諸島問題に始まった日本の報道の過熱ぶりは日本からのメールで知るくらい、中国の一般市民の日常生活にナショナリズムは無関係。ノーベル平和賞問題はこの国の政治体制の問題。私たちが「地球市民」であり続けるためには、マスコミ報道を冷静に見て、自らの頭で考え、行動することの大切さをあらためて感じましたね。では、また。

（副理事長　斎藤 聖：鞍山に日本語教師として一年間赴任中）

鞍山随一の観光地「千山」に学生たちと登る

生物多様性と私たち

去る10月名古屋で、地球と人類の未来がかかる生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催された。これを機に「途上国の貧困削減と生物多様性について考える～NGOが果たすべき役割とは？」と題した民間会議が開かれ、JVCラオスのグレン氏がラオスで見られる森林喪失の事例報告を行った。そして森を守るためには、その地域に住む住民が伝統的に使ってきた〝共有地〟を利用・管理・運営する権利確立の重要性について意見が交わされた。

森や川など自然の恵みに拠って生きてきた途上国の多くの人々は、地域の生物多様性を彼らの伝統的な知恵で持続的に管理し保全してきた。その喪失は、日々の糧ばかりか独自の豊かな伝統や文化が、貴重な生態系と共に消滅することを意味する。会議でグレン氏は、「そうした危機を招く最大の要因は、〝貧困脱出〟を旗印とした大規模な商業開発による森林の減少である」と訴えた。例えば、ラオスの豊かな森は、ゴムやユーカリの単一作物のプランテーションへと変わり、私たちのためのタイヤやコピー用紙へとなり使い捨てられていく。生物多様性保全に向けた取り組みは、また先進国社会のあり方への私たちの反省にもつながっていく。

今回、ある経済学者が、「発展」「先進国」という概念を問い直す必要を述べた。また、自然との共生については、途上国での住民主体の取り組み事例も報告された。途上国から、〝進んでいる〟私たちが学ぶことは大いにある。

経済発展を至上とする近代化の過程で私たちが失ってしまった多様な価値観をとりもどすこと。そのことが、自然だけでなく、私たちの地域社会や文化の多様性を守り、より高めていくことにつながるのだと思う。

（ラオスチーム　中野 真理子）

外国籍の人たちにも住みやすい神奈川をめざして

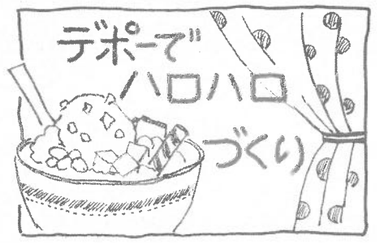
今から12年前、外国籍県民やNGOの県政参加を推進するために、外国籍県民かながわ会議とNGOかながわ国際協力会議が設置され、これまで6期の会議が行われてきた。地球の木は、第1期と第2期を横川芳江さん、第3期を乳井京子さん、そして第5期と第6期を丸谷が務め、第6期は委員長として会議を進めてきた。残念ながらNGO会議は今期で終了することになったが、この機会に今期の提言を紹介したい。

第6期では、最も重要な課題として足もとの国際化について現状を調べ、話し合ってきた。12年前には116,000人であった外国人登録者数が、現在は175,000人を超えるようになった。しかし、外国人にとって、神奈川は住みやすいところだろうか。適正なサポート体制とともに県民の理解が大切である。多様な文化背景を持つ人たちと理解し合い、助け合いながら暮らすことが豊かで平和な神奈川につながるはずだ。基本的人権を保障し、外国籍県民自身が多文化共生事業に参画すること、行政とNGO、企業、大学など各分野の人たちの協働で実現させることを基本的視点とした。

提言は、公営住宅入居サポート、医療通訳派遣システムの充実、多文化ソーシャルワーカーのしくみづくりなど生活の問題。母語学級の検討と義務教育を過ぎた子どもたちの学びの場の確保。さらに、自立に向けた日本語学習や国際理解・開発教育の促進、市民活動のための寄附による県民ファンドの創設などの11項目である。最終報告書は10月27日に松沢県知事に提出され、検討が進められる。

（理事長　丸谷　士都子）

最終報告書を県知事に手渡す



8月21日、生活クラブ登戸デポーに大人と子ども20名が参集。フィリピンの人達の暮らしについて（乗り物ジプニーの乗り方や椰子の実での床磨きなど）学んだ後、フィリピンのデザート、ハロハロを作りました。フィリピンは長い間、スペイン、アメリカ、日本などの植民地だった歴史を持ち、混じりあった文化の中から生まれたハロハロも正に「ごちゃ混ぜ」という意味。そんなことを話し合いながら作ったハロハロに、子どもたちは「ハロハロと日本のかき氷はガリガリ氷を削って作るのは同じだ」「ハロハロはアイスクリームやプリン、あんこが入っていて豪華だね」などなど。暑い中あっという間の２時間でした。

（川崎北ブランチ　豊田 由紀子）

私は、横浜・本郷台でおこなわれた、あーすフェスタに地球の木の一員として二日間参加しました。一日目は「ちぢみ売り」を、二日目は「グッズ売り」を手伝いました。「ちぢみ売り」は、自分に向いており、地球の木の役に少しは立てた気がしましたが、「グッズ売り」は、グッズの知識がなかったことから、ブースに来て下さった方々にうまく説明することも、会話を膨らませることも出来ず、苦戦してしまいました。

でも、今回、私は、世界各国の人々、文化や食を通して、多様な価値観や文化を理解し、尊重しながら共生することの素晴らしさを学びました。あーすフェスタに参加したからこそ、たくさんの笑顔にも出会え、とても貴重な経験をすることが出来ました。　（学生インターン・土屋 友乃）

活動日誌（9月～11月抜粋）

9月	4日	地球の木カフェ「エッセイ修行」
	7日	第3回ブランチ連絡会
	9日	第3回理事会
	11~12日	あーすフェスタ2010（本郷台） 磯子国際交流フェスティバル
	15日	地球の木サロン「Tea&Talk」
	25日	地球の木サロン「ハングルに親しむ」 ひらつか市民活動センターまつり（西湘ブランチ）
	10月2~3日	グローバルフェスタJAPAN2010（日比谷）
	9日	地球の木サロン「ハングルに親しむ」
	12日	第4回理事会
	16~17日	よこはま国際フェスタ2010（象の鼻パーク）
	18日	第4回ブランチ連絡会 グレンさん帰国報告会（ラオスチーム）
	20日	地球の木サロン「Tea&Talk」
	21日	地球の木サロン「実践英会話」
	23日	地球の木サロン「エッセイ修行」
	24日	ネパールデイ（ネパールチーム）
	27日	NGOかながわ国際協力会議で知事に提言を提出
	28日	中間監査
	31日	かまくら国際交流まつり（鎌倉・高徳院）
11月	9日	第5回理事会
	13日	地球の木サロン「ハングルに親しむ」
	15日	第5回ブランチ連絡会
	16日	マジカルシュガーワークショップ（茅ヶ崎・鶴峰高校）
	17日	ネパール勉強会「海外NGOから学ぶ」（英語） 地球の木カフェ「Tea&Talk」
	20日	オルタ館フェスタ（オルタ館）
	27日	アソシエーション文化祭（オルタ館）
	28日	ネパールスタディツアー説明会（事務所）

INFORMATION

★地球の木のプロジェクトはあなたの会費で支えられています

地球の木カレンダー2011『アジアの瞳』発売中！

カレンダーのお買い忘れはありませんか。
皆様のご購入がラオス（森林保全と自然農業）・ネパール（教育・村人主体の生活向上）・カンボジア（職業訓練センター支援）に役立てられます。

中綴じ壁掛型、書き込みしやすい、月の満ち欠けを表示。
価　格：1,500円
サイズ：280mm×385mm（使用時：560mm×385mm）
印　刷：環境保護印刷・オールカラー
写　真：三井昌志

お申込は、電話・FAX・メールで受付ております。

年末募金キャンペーンのお願い

今年の年末募金キャンペーンは、「ラオス村びと支援」「カンボジア夢織り募金」「しあわせ村民キャンペーン」です。
ご協力をどうぞよろしくお願い致します。

＊詳細は同封のちらしをご覧ください。

よこはま国際フォーラム2011

本当に必要な「援助」って？「国際開発協力」って？「ボランティア」って？国際協力のあり方と私たちの関わりを考えるワークショップです。

■ワークショップ「援助する前に考えよう」
■日　時：2011年2月12日(土) 15：00～16：50
■会　場：JICA横浜国際センター4階セミナールーム6・7

第10回「南北コリアと日本のともだち展」

日本と朝鮮半島の子どもたちを絵やメッセージでつなぐ「南北コリアと日本のともだち展」。今年で10周年を迎えました。東京、ピョンヤン、ソウルで子どもたちが作り上げた共同制作「行こうよ！カジャカジャ！おまつりひろば」と子どもたちの絵「テーマ：10年後の私」を展示します。

絵画展示
■日　時：12月2日～5日（12:30～17:30、土・日は10:00開場）
■場　所：青山こどもの城　ギャラリーアトリウム
■入場無料

トーク・イベント
■日　時：12月4日(土) 14:30～16:30
■場　所：東京ウィメンズプラザ　2階　第1会議室
■入場料：1,000円
主　催：「南北コリアと日本のともだち展」実行委員会

＊詳細は、同封のちらしをご覧ください。

地球の木カフェ in 鎌倉

地球の木の活動紹介と支援地のグッズの販売を行います。師走の気ぜわしい一日、鎌倉五山の円覚寺のお庭を散策し、お茶をしにいらっしゃいませんか。

■日時：12月18日（土）11：00～16：00
■場所：鎌倉　円覚寺　寿徳庵
（JR横須賀線「北鎌倉」駅下車1分）
■参加費：無料　別途入門の時に拝観料300円

＊詳細は同封のちらしをご覧ください。

地球の木 ネパール・スタディツアー2011
…幸せの原点をたずねる旅…

「幸せ分かち合いムーブメント」の現場を訪問します。住民参加型の地域開発をめざすカマル・フヤルさんの講座を受け、タマン族の村にホームステイ。幸せをもたらすものは何か、考えるきっかけをきっと与えてくれます。

■日　時：2011年2月26日（土）～3月6日（日）8泊9日
（注：日程が変更されました）
■訪問地：ネパール　カトマンズ、カブレ郡マンガルタール村ほか
■参加費：22万円（航空券、諸税、ビザ、宿泊、食事、現地交通費、プログラム費を含む）
燃油サーチャージは含まれません。会員でない方は初年度会費が必要となります。
■対　　象：テーマに関心のある健康な人
■説 明 会：11月28日（日）、12月11日（土）
10:30～12:00　地球の木事務所にて
■募集人数：10名（政最少催行人員5名）
■募集締切：第1次締切 2011年1月11日
定員になり次第締め切ります。
旅行企画：風の旅行社
現地プログラム企画：地球の木
申込・問合せ：地球の木
＊詳しくは資料をご請求ください。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。
また，神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど

VEGETABLE OIL INK
環境に配慮した「植物油インキ」を使用しています